栽培漁業技術開発事業調査（要約）
（タイワンガザミ）

佐多　忠夫*1、宮城　政和*2

Ⅰ.目的及び内容

タイワンガザミ資源の積極的な増加を図るために、人工種苗の放流調査と天然における資源生態調査を与勝海域で昭和59年度から継続的に実施し、栽培漁業の技術開発と事業化を図ることを目的とする。

本調査結果は「平成6年度栽培漁業技術開発事業調査報告書」にて報告したので、ここでは要約を記した。

Ⅱ.要　約

1．今年度は与那城町地先の海中道路北側の干潟水域にて、第１回次130千尾（平均全甲幅7.0mm）、第２回次46千尾（8.4）、第３回次103千尾(7.7)、第４回次180千尾(7.2)、計459千尾の稚ガニの放流を行った。

2．放流稚ガニは放流後数日間で放流区域内の密度が急激に減少し、逸散がかなり早かった。

3．天然稚ガニの定着は3月－12月下旬までみられ6月頃と10月頃にモードがみられ、前者の定着群の密度は、1991年のそれより高かった。

4．干潟でみられるタイワンガザミは2cm以下の個体が多い。

5．与那城町、石川市、勝連、沖縄市、中城漁協の漁獲量調査を行った結果、1994年の漁獲量はそれぞれ15.6トン，4.6，0.9，9.0，3.9であり、与那城町漁協が最も多かった。

6．タイワンガザミの平均単価は石川市漁協が855円と最も高く、ついで中城668円，沖縄市582円、与那城町540円、勝連415円であり、全漁協で1993年の平均価格を下回った。

7．与那城町漁協に水揚げされるタイワンガザミは，雌雄とも夏場に小型個体が、冬場に大型個体が多く漁獲される。

8．与那城町漁協において、1994年は1993年同様に1992年より漁獲努力量が減少したにも関わらず、漁獲量・CPUE の増加から、与那城海域のタイワンガザミ資源量は増加したものと考えられた。

9．タイワンガザミは標識放流の結果、海中道路の水路を通して、北側と南側を行き来していることがわかった。

11．与那城町漁協のタイワンガザミの漁獲サイズは1990年以降小型化の減少がみられた。

12．与那城町漁協の漁獲量は、1991年以降他の漁協の漁獲量を上回るようになった。

13．オキナワフグによるタイワンガザミ稚ガニ捕食試験の結果、全甲幅3cm以上の稚ガニは、捕食されにくいことから、放流サイズの検討も必要であろう。

＊１：現所属　栽培漁業センター
＊２：現所属　沖縄県漁業協同組合連合会